

## コミュニティをベースにした社会認識形成のための総合的カリキュラムの構成原理

—Historic Landmarks Foundation of Indiana の教育プログラムを手がかりにして—

Construction Principles of Interdisciplinary Learning Curriculum for

Formation of Social Cognition Based on Community :

In the Case of Education Program from “Historic Landmarks Foundation of Indiana”

關 浩 和

(広島大学附属小学校)

### I はじめに—問題の所在—

社会認識形成を培う教科としては、現行のカリキュラムでは、社会科が中心に担っている。社会科授業において、子どもたちが住んでいる地域の特色を明らかにし、地域のことをより詳しく知るための学習が行われている<sup>(1)</sup>。学習指導要領においては、主に小学校中学年や中学校地理的・歴史的分野における「身近な地域」の学習において、「地域学習」という用語で一般的に認知されている<sup>(2)</sup>。第3・4学年では、地域の産業や消費生活の様子、地域の地理的環境や社会的事象を観察、調査する内容がある。これらの内容は、地域社会の一員としての自覚をもち、地域社会に対する誇りと愛情を育てることが目的である。地域にある遺跡や文化遺産などについては、第6学年において、文化遺産が、先人の働きの所産であることを学ぶ内容がある。文化遺産は、当時の人々の願いが具現化され、生活を支えているものであることを理解していく扱いになっている。中学校の地理的・歴史的分野においては、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査を行う内容がある。先人の業績や優れた文化財について、興味・関心と理解を深め、我が国の歴史や伝統を大切に、国を愛する心情を育てることが目的である。中学校では、目的だけでなく、方法的にも身近な地域を学習することになっている<sup>(3)</sup>。中学校地理的分野では、単なる地域理解にとどまらず、地理的な見方・考え方の基礎を学ぶ場として位置づけられている。また、中学校歴史的分野では、歴史についての学び方を身に付ける方法として重視されている<sup>(4)</sup>。

しかし、これらの学習に共通しているのは、地域における様々な社会的事象、とりわけ種々の協力的・分業的活動の在り方が、環境や時代によって異なっても地域住民の参加や協力の必要性は、大切であることを具体的な観察を通して学習者に理解させようとするものである。この地域をベースにした社会認識形成のための方法としては、人物の働きや業績に共感して理解していく方法である。人物の行為によって生み出された時代や文化のすぐれた個性・特色を理解し、興味・関心を高めることで、遺跡や文化財の存在の意味を社会科単独のカリキュラムによって理解する構成になっている。特に、小学校社会科ではこの傾向が強い。

この社会科単独のカリキュラムは、人々が生活している生活空間としての環境構成からの意義づけという点に課題がある。つまり、地域を「空間」として捉え、空間に存在するすべての事物・事象を総合的に理解する構成になっていない点である。これは、現行のカリキュラムにおいて、それぞれの教科が単独で行うことの限界でもある。地域をその存在意義から理解することを目的とすれば、様々な領域や分野の導入が必要である。

次に、身近な地域の文化遺産を調べるための視点が、明確になっていないことがあげられる。これは、遺跡や文化財を観察、調査するための分析視点が不明確な点である。このことは、学習者の興味・関心レベル内での分析に留まっている指摘にも共通している<sup>(5)</sup>。

これは、地域の地理的環境や社会的事象を観察や調査するための分析視点よりも、人々の生活の変化や人々の願い、地域の人々の生活の向上に尽

くした先人の努力・工夫を共感的に理解する構成に重点が置かれていることで、学習者の持つ常識的な内容を超越することができない問題点でもある。これは、新学習指導要領の目玉である総合的な学習でも同様である<sup>6)</sup>。

つまり、地域における社会的事象の存在の意義を科学的に分析し、理解する構成にしていくことが今後の課題であると言える。

そのような中で、地域を総合的な空間であるコミュニティとして位置づけ、コミュニティをベースに総合的なカリキュラムによる教育プログラムを提供しているのが、**Historic Landmarks Foundation of Indiana** (以下H. L. F. Iと記す。)である。このH. L. F. Iは、建築学及び歴史的に意義のある建物と場所を対象として、その救済と保護を目的とした非営利的な団体である。建物を復元し、支持者の財政援助を提供するだけでなく、小・中学生のレベルを対象とした教育プログラムを提供している。地域を空間として意識し、空間に位置づけられる建物を通して、コミュニティを理解するだけでなく、積極的にコミュニティに参加・行動していく構成が見られる。

この教育プログラムの分析を通して、社会科単独ではなく、総合的なカリキュラムによる社会認識形成のための方法論としての構成原理を明らかにしていくことを本研究の目的とする。

## II H. L. F. Iの教育プログラムの内容構成

### 1 H. L. F. Iの全体構成

H. L. F. Iの教育プログラム<sup>7)</sup>は、建築物、歴史、街並み、都市計画などについて教えるための学習活動や指導計画の情報である。学習者が、インディアナの歴史や建造物に対しての新しい見方を獲得するための創造的な方法を提示している。H. L. F. Iの教育プログラムは、①学習教材・教具②ランドマークコンテスト③情報センター④実地見学ツアーという4部門で構成されている。

### 2 H. L. F. Iの部門別構成の概要

#### ① 学習教材・教具部門の構成

建物の由来について7つのツールが準備されている(表1参照)。それぞれのツールの概要を示

表1 学習教材・教具リスト

番号	教材・教具名
1	建築スタイルを学ぶカードゲーム
2	建造物と建築材料のコレクション
3	建造物を構成している基本的な要素
4	建物探検隊になろう
5	時系列で学ぶ建築スタイルの変化
6	インディアナの建築スタイルの変化
7	危機にさらされている10の建造物

す。

教材1は、学生が、種々の建築のスタイルとマッチさせながら、州を横断する架空の調査旅行ができるカードゲームで構成されている。

教材2は、19世紀の建築物の写真やイラスト、建築材料のコレクションの実物である。建築物の時代を推測して建築材料を対応させていく。

教材3は、建築物の形、色、建築上の特徴を探し出し、建物を構成している個々の要素について、ワークシートを使用して学ぶようになっている。

教材4は、2台のポラロイドカメラと回答用紙を持って、屋内や屋外で、建築構造の要素を採検する活動構成になっている。

教材5は、インディアナと合衆国の歴史と並行して、自分の地域の歴史を学ぶようになっている。その方法は、建築のスタイルの変化と、歴史上の出来事に関係づけながら学ぶような構成になっている。教材6は、19世紀のインディアナ州全体のシミュレーションツアーができる1800~1900年代のスライドが提供されている。これは、建築のスタイルと用語を学ぶことが目的である。

教材7は、インディアナにある建築物や通りなどの中で、その存在の危機にさらされている10の建造物のリストが提示されている。

#### ② ランドマークコンテスト部門の構成

H. L. F. Iとインディアナの子ども博物館が後援をしている年に1度のコンテストである。インディアナのランドマークの歴史と現状をモデルとして作り上げる。コンテストの優秀作品は、2週間子ども博物館で展示される。コンテストの日には、学生は、彼らの作品やその歴史、内容について審査員とともに議論をする。コンテストは、

創造性、精度、研究の深さに基づいて審査される。出品されている作品としては、建造物の形成原料の解明をしたり、危険にさらされた建造物については、新聞形態で紹介をしている。コンテストは、教師が、コンテストに作品を出品するために、どのような学科に、どんな創造的な方法で教えているかが評価の対象になっている。

### ③ 情報センター部門の構成

授業づくりのためのリソースを準備している部門である。学習者用の本、教室での活動構成、総合的なアプローチによる試験、環境を意識化するための指導のあり方、ビデオカセットなどが提供されている。対象は、学生、教師、保存組織及び歴史研究者、古い建造物のオーナーなどを広く対象としている。インディアナポリス本部だけでなく、H.L.F.Iの組織は、インディアナの歴史を保存することを助けるために地域に5つのオフィスを設置している。

### ④ 実地見学ツアー部門の構成

歴史的なランドマークは、インディアナの生活史を見るために、2つの典型的な博物館を取り上げている。ケンブリッジにあるハドルストン博物館とインディアナポリスにあるモリス・バトラーハウス(ビクトリア朝の大邸宅)である。特に、モリス・バトラーハウスでは、教育プログラムを作り、歴史的なテーマを通して、重要な用語と建築のためのスキルを学生に教えている。

## Ⅲ H. L. F. I の教育プログラムの構成原理

### 1 学習教材・教具部門の全体構成

H. L. F. I の教育プログラムは、4部門で構成されているが、活動構成が明確に示され、教育プログラムの中核である学習教材・教具部門を取り上げる。

学習教材・教具のリソースは、*Walk Around the Block*である。*Walk Around the Block*は、アメリカの建築家協会が、建築物の保存やデザイン、都市計画に関する問題や、活動へ支援、環境教育を目的として作成されたものである。建物や公園、通り、彫像、看板などについて、リサイクルおよび倫理の観点から、建物の原材料の使用との関係を具現化している。それは重要な建物と場

所を救い、技術革新の影響を考えたり、未来の計画を立てたりすることを目的とする。また、学生、教師、保護者及び救済者のための自己発見プログラムでもある。このワークブックは、学生が、彼らの家庭や学校のある地域、最終的には近隣都市のツアーをしながら、建築物のデザイン、都市計画、環境との関連などについて理解するためのものである。また、都市、建物、通りを視覚的及び歴史的な側面からアプローチしていくことで、彼ら自身のコミュニティについて学ぶためのプログラムであると言える。

*Walk Around the Block*の内容構成は、①知識ベースの開発②知識ベースの実行③総合的な活動のテーマ④責任と評価⑤実践事例の紹介⑥リソースの確認と製品紹介という全6章で構成されている。学習活動と教材に関連するのは、主に①～④である。これらは、第3学年～第7学年のレベルを対象として、すべての学年に適応できるプログラムである。また、①～④の内容は、さらに、教師用ページと学習者のワークページで構成され、さらに、総合的な活動と実践事例が提示されている。学習者のワークページは、知識ベースとなる学科が提示されている(表2参照)。

①知識ベースの開発は、用語と意味を形成するためのセクションである。「視覚」・「用語」・「構造」をキーワードに構成されている。視覚は、建物の「見方」を学ぶ。用語は、建築物の構造や都市計画の用語を知る。構造は、建物の構造と都市機能の理解を目的として設定されている。②知識ベースの実行は、基礎的なスキルや情報と学習活動のセクションである。活動は、総合的・協力的な活動で構成されている(表3参照)。③総合的な活動のテーマは、一般的なカリキュラムの中で、基礎となるスキルを実行するセクションである。学習者に、建物や都市の見方や、その働き、時間経過による変化などを考え、意思決定できることが目的である。教室や学校という特定の場所だけではなく、家庭生活や施設利用など日々の生活の中で位置づけられるように示唆している。つまり、*Walk Around the Block*を実行していくときにベースとなる学習方法や学習活動が具体的に示されている。都市は、自分自身の都市からグ

表2 学習者のワークページの構成

1 知識ベースの開発		SS	M	S	A	LA
1	ブロック	○	○	○		
2	ランドマークの命名	○	○		○	
3	木のマークのある場所	○	○	○		
4	マップの凡例の仲間分け	○			○	○
5	マップづくり	○			○	
6	自分の歩幅		○	○		
7	小さな世界	○	○			
8	支柱とまぐさの原則			○		○
9	ジャックが建てた家			○	○	
10	土地の利用	○			○	
11	自分の役割と責任	○			○	
2 知識ベースの実行						
1	予備調査	○				○
2	特性調査	○				○
3	地図作成の方法	○	○		○	
4	上・下・周りを見る	○		○	○	○
5	視覚的調査の要素	○		○	○	
6	建物の見方	○		○	○	
3 総合的な活動のテーマ						
1	聞き取り調査	○				○
2	家族の物語					○
3	写真記録の活用方法	○	○		○	○
4	棒グラフの活用方法	○	○			
5	座標軸の使い方	○	○			
6	タイムライン	○	○			○

SS: SOCIAL STUDIES M: MATHEMATICS  
S: SCIENCE A: THE ARTS LA: LANGUAGE ARTS

ローバルな視点へと拡大する方法がとられている。

④責任と評価のセクションは、社会問題とチャレンジのセクションである。保存・テクノロジー・保護・安全・美学・適法・未来設計（住宅・都市）という7つのキーワード（表4参照）を総合的、協力的に学習していくような構成になっている。

これらの知識ベースを開発・実行することで、コミュニティや都市を再発見することになる。そのことは、コミュニティや都市、建物の評価基準と環境形成者としての意義を獲得できるような構成になっている。

## 2 「建物探検隊になろう」における構成原理 学習教材・教具の典型的な事例として、教材4

「建物探検隊になろう」を取り上げる。「建物探検隊になろう」は、地域にある建物の観察や調査を目的とした教材である。学習者は、2台のポラロイドカメラと回答用紙を持って、屋内や屋外で建築構造の要素を探検する建物調査の活動と自己発見の活動という2つの活動が中心になっている。

演習では、まず、自分の家やアパートの正面図をスケッチする。スケッチは、芸術的である必要はないが、煙突、窓、玄関、屋根、装飾の色など注意深く観察する。次に、近隣にある建築学上、特徴のある建物を選びスケッチする。そして、スケッチした場所を、他の学習者が探し出すゲームを行う。さらに、築50年程度の建物を探す活動が加わる。探し出したら写真をとるか、建物をスケッチし、すべての形や原材料を識別する。そして、同じタイプの新しい建物と比較する。同じタイプの建物とは、一戸建ての家ならば一戸建ての家、教会ならば教会で比較する。比較する視点は、視覚的な比較だけでなく、個々の建物から受けるイメージを比較する。そして、なぜ、建物が改良されてきたのか理由を導き出せるようにする。さらに、建物の観察・調査だけでなく、都市計画を意識した中での建物の意義や周辺の環境にまで目を向け、都市に直面している問題や解決方法、住宅や都市の未来設計を考える。

一方、家庭では、自分の両親に、インディアナポリスのモリス執事家やケンブリッジのハドルストン農家と自分の家を比較して説明をする。リビングやキッチン、浴室などの部屋の違いや博物館の家具や調度品と自分の家のものとの違いを見つける。また、家族の歴史が分かる家系図づくりを聞き取り調査により取り組む。家族が、今まで生きてきた記念になる出来事や場所を、テープやビデオテープに記録しながら聞き取り調査をするのである。

前者の建物の観察・調査の活動では、観察・調査のための視点が、ワークシートに示されている。学習者が建物を見るための視点（表5参照）が明確に示されていることにより、比較するための基準が明確になっている。また後者は、このプログラムの注目すべき点である。それは、学習者と教師が、その学習の中で、それぞれの学校、近隣、

表3 知識ベース実行のセクションの内容

ベースとなる活動及び学科	主な学習内容
1 書く	建物記述, 手紙を書く, 民話
2 読む	調査研究, リソースの発見, 比較, 対照
3 数学	計測, 測量, 見積もり, 歩幅と縮尺
4 社会科	読図, 聞き取り調査, 地理
5 科学	構造の原理, 原料
6 芸術	描写, モデル制作, 製図

表4 知識ベースのキーワード

1	保存
2	技術革新
3	保護
4	安全
5	美学
6	適法
7	未来設計

表5 建物探検のための視点

建物観察の要素		建物探検のための視点		
1	建物の外観	① 建物の相対的な高さ ④ ドアのサイズ・形 ⑦ 壁(原料・構造・装飾)	② 通りからの距離 ⑤ 屋根の形 ⑧ 建物の原料・手ざわり	③ 窓のサイズ・形・間隔 ⑥ アーチの形・方法 ⑨ 建物の装飾の色・タイプ
2	建物の意義	① 建物の存在意義      ② 建物の構造の識別		
3	建物の周辺環境	① 通り・縁石・歩道・階段の舗装原料    ② 街路樹や街灯と外観の影響(景観) ③ 建物の評価・外側からの計画・内側からの計画・原料・外観・装飾 ・色・光と影・距離のスケール・形・割合・空間・構造・技術 ・状況(街並みに合う)・エネルギー効率・全体のシンボル・イメージ		

Walk Around the Block. Ginny Graves, Hon. AIA 1997. を参考にして関が作成。

都市において、一つの経験として自己発見の活動が重視されている点である。コミュニティを形成する人間の自己発見プログラムという意図的な内容を組み入れていくことで、学習者個々にコミュニティを形成していくために、存在している個人の存在が強調されていると言える。

「建物探検隊になろう」の構成原理には、真の意味での個を重視する視点が組み込まれている。個は、全体の中での個の役割が意識されるのではなく、個に形成される社会認識や自己認識形成の集まりがコミュニティを形成するという積極的なスタンスである。教材構成は、教科分立のカリキュラムの基に見られる知識と経験の乖離や知識の断片性、学校と生活との遊離性の解消が強く意識されている。また、知識の蓄積よりも適用を重視している。つまり、自分の家の正面図のスケッチから、地域にある建物を探し出すゲームや時系列による建物の比較など、建物の見方について知識を蓄積するのではなく、学習者が獲得した知識を多様な建物に適用させる教材構成になっている。さらに、家族への聞き取り調査や家系図作りなど学習者自らの経験や経験の掘り起こしによって意味を創造していくような構成になっている。これらは、問題解決を通しての知識獲得・適用と自己認

識の統合的獲得・創造といった認識形成のための構成原理である。

#### IV H. L. F. I の教育プログラムの構成原理の意義

H. L. F. I のプログラムの意義は、まず、「建物」をシンボルとして取り上げ、「建物」を通して学ぶ社会認識形成のためのアプローチにある。「建物」つまり、ランドマークをベースとして社会を見ていくことで、我が国の社会科での社会認識形成とは、明らかに違う構成原理の意義がある。

##### 1 「建物」を通して学ぶアプローチ

H. L. F. I のプログラムでは、地域を時間を含めた空間として意識することで、空間を形成している「人」や「物」がクローズアップされ、それらの配置や流れが意識されるコミュニティとして意識されるようになる。さらに、人間や人間が作った社会環境や自然環境を含めた総合的な視点で、「共生」としての地域環境という視点が組み込まれている。そのような地域へのアプローチは、地域にある遺跡や文化遺産に共感し、それらに興味・関心をもち、人物の行為によって生み出された時代や文化のすぐれた特色を理解していく構成とは明らかに違い、遺跡や文化遺産を含めた「建

物」の建築学上の意義や構造を学ぶとともに、建物が存在することで、周辺の環境にどのような影響を及ぼしていくのかを考えていく方が、思考力や判断力の育成の視点からも、また、すぐれた文化遺産の特色を理解していく視点からも有効な構成原理ではないかと考える。

## 2 「環境形成者」としての視点

H. L. F. I のプログラムは、コミュニティへの個人の積極的関与が意図されている。空間の中に生きる同じ人間として、社会環境や自然環境を含めた「共生」の視点で、自らが行動する関与を意図している。決して無理な強制的なものではなく、「環境形成者」としての自分を見直し、参加・行動していくような積極的関与である。これは、このプログラムが、コミュニティをベースにした自己発見プログラムと位置づけられているところも大きいと言える。一人一人の個の成長がなければ、個の集まりである社会は成り立たないと考える教育観があると言える。

## 3 観察・調査の視点の明確化

H. L. F. I のプログラムは、「建物」の見方の視点を明確に提示している。その視点は、社会科授業にも還元可能である。建物の視点としては、窓、ドア、屋根、壁、原料、装飾などの視点があげられている。さらに、それらの機能分析も取り入れられている。例えば、窓やドアの機能は、精神的な機能と社会的な機能で意義づけてあるように、建築学のキーワードを明確に提示している。社会科授業で「調べる」ことが重視されているが、学習者は、何を調べればいいのか分からない場合や、小学校の場合は特に、学習者が「調べたいことを調べる」方法がとられ、本質に迫れない場合も多い。「建物」を通して、自然及び人間によって形成された環境との関係を追究することや、様々な気候や土地の構成及び異種の文化を追究することにも応用可能な視点であると言える。

## 4 「参加・行動」のためのネットワークの視点

次に、「参加・行動」のためのネットワークが確立されている点があげられる。学習者が、「参

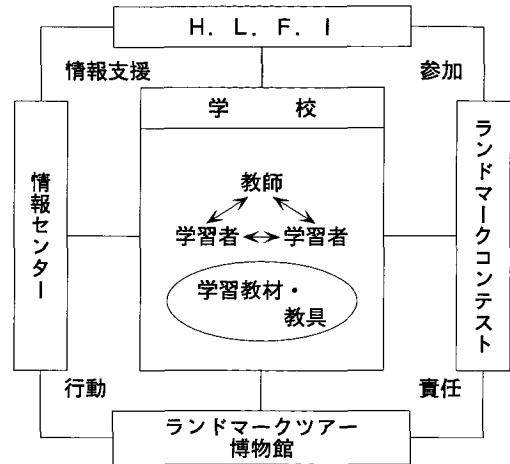


図1 H. L. F. I の全体構成図

加・行動」するためには、それをサポートする「人」や「物」が必要である。このH. L. F. I のプログラムの構成原理には、コラボレーションの視点がある（図1参照）。学校での単独の授業ではなく、複数教科で合科的に協働で取り組むカリキュラムであるとともに、情報センターの提供や地域にある社会施設のツアーなど、H. L. F. I が中心となり、地域と学校が協働でコミュニティに対する認識を深める構成になっている。これは、教室での学習活動に限定されるのではなく、ランドマークコンテストや情報センターの設置により、地域・各種学校間の交流、博物館やインディアナ州を巡るツアーによる実地見学の設定など、ネットワーク化が図られている。学校という枠の中だけで、営まれるのではなく、コミュニティをベースに、コラボレーション体制が確立されているところにこのプログラムの意義がある。

## 5 「参加・行動」をベースにした学習過程の視点

最後に、基礎的な知識ベースから高い思考スキルに至る活動方法が多様に組み込まれた教材構成である点があげられる。建築物の構造を学ぶために、「建物探検隊になろう」のような観察・調査の視点を明確にした解説書の提示の他に、それを自分たちの地域に適応させる活動が多様である。例えば、同じ大きさの箱で建物を製作して、都市づくりに発展させたり、建物の素材としてのれん

がを使用した建物づくりをしたりする活動がある。また、コンクリートづくりの実演や、学習者の手や足、体全体を使ってのボディランゲージでの表現などの活動も組み込まれている。都市開発に関しては、ブレインストーミングやロールプレイが位置づけられている。知識ベースとなる基本的なスキルが教育プログラムに明示され、知識・理解→適応→分析→統合→評価という学習過程が確立している(図2参照)。

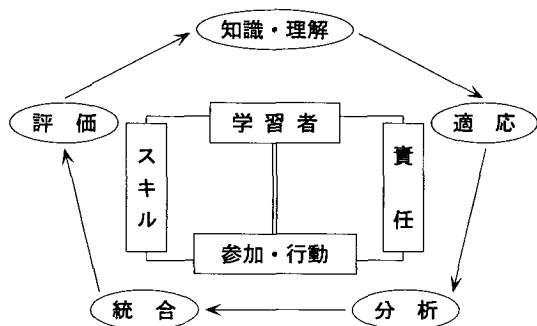


図2 「参加・行動」をベースにした学習過程

我が国の社会科では、地域を取り扱う場合、できるだけ身近な遺跡や文化的遺産などを含めた社会的事象を対象とする。身近な事象や地域を取り上げることは、学習者にとって見慣れた、親しみやすい対象なので、学習者の興味・関心を高めることになるので、地域を取り上げることは問題ではない。ただ、我が国の社会科、特に小学校の地域学習では、地域の自然環境や人口、歴史、産業、交通などの調査も行うが、主に地域に生きた、あるいは生きる人物を切り口として取り上げる場合が多く、その生き方を学ぶ社会科になっている<sup>8)</sup>。つまり、学習者は、人物の生き方や業績に対する「共感」的理解の方法による構成原理である。また、「参加・行動」という地域への関与は、何かのテーマを調べるための「参加・行動」が主流になっている<sup>9)</sup>。

しかし、H. L. F. Iの教育プログラムは、コミュニティという空間の中に生きる同じ人間として、社会環境や自然環境を含めた「共生」の視点で、コミュニティへの個人の積極的関与が意図されているところに、この教育プログラムの意義がある。

以上のことから、H. L. F. Iの教育プログラムの構成原理は、社会認識形成のための多くの知見が得られるのではないかと評価できる。

## V おわりに

H. L. F. Iの教育プログラムを分析すると、学校教育という大きい枠組みの中での従来の教科の枠の見直しや新しい領域の設定など、「建物」を切り口として、コミュニティをベースにした学習設定が可能である。従来の「教科」という発想は、それぞれ単独で成り立つ教科カリキュラムが教育課程という大きい枠を形成してきた。この発想を転換するような構成原理である。

### 1 コミュニティの環境形成者としての役割

地域という用語は、小学校中学年の「地域学習」や中学校・高等学校での「地域調査」に関連するイメージが強い。それらでイメージされる地域は、身近な地域を知るための目的として対象になっている。我が国では、個は、全体の中で機能していくための個の存在が強調される場合が多いので、地域で対象となるのは、そこに生きる人たちの活動や、地域に貢献した人物や、業績のある人たちの行為理解が主である。しかし、H. L. F. Iのプログラムは、同じ地域を対象としていても、時間的・空間的な比較による現状分析から未来設計までを意図した総合的な活動や事例研究が組み入れられた教科横断的なプログラムになっている。

社会科(歴史学・経済学・政治学・地理学)だけでなく、数学・科学・芸術などの領域が設定されている。扱われるテーマも、保存・最新技術・成長・安全・住宅・都市の未来設計など、地域がベースとなったテーマである。人間を含めた自然的・社会的な環境形成のために、個々が、環境形成者としての人間のあり方を学ぶプログラムであると言える。「参加・行動」には、「責任」が強調されている。建物、ブロック、近隣、都市を含めた地域を調べるだけでなく、それを、自分のためのコミュニティという意識で、よりよい場所にするために、学習者の知識をコミュニティ形成のために活用していくために、各個人の役割や責任を考えていこうとする視点である。

また、コミュニティを形成する人間の自己発見プログラムという意図的な教材も組み入れていくことで、個々にコミュニティを形成していくために存在している個人が強調されている。真の意味での個を大切にす視点は、全体の中での個の役割を意識するのではなく、個に形成される認識、自己認識形成を意図する方法論が組み込まれているのである。

このことは、コミュニティ（人間や社会環境、自然環境をすべてを含めたもの）そのものをフィールドとするような総合的な学習へ転用が可能である。地域を「建物」という切り口で見えていくことで、環境形成者としての責任ある個を見つめることを意図している。我が国で実施される総合的な学習への発展性が期待できる内容である。

## 2 積極的地域参加を意図するネットワークの確立

地域と学校のかかわりにおいても、学習者が生活の学習化（身近な地域の生活のことを学校での学習に組み入れる）や、学習の生活化（学校で学んだことを地域の生活に生かす）という地域と学校の相互作用がある。地域に点在している図書館や資料館などの公共施設が、それぞれ単独で学校とかかわるのではなく、ネットワークとして確立していることが必要である。地域の博物館、情報センターなどとの提携、つまり、コラボレーションにより、学習者が、積極的に行動し、地域参加していくことが可能になるのである。

このH. L. F. Iの教育プログラムは、まだアメリカで始まったばかりのプログラムであるが、背後には、「責任」ある「参加・行動」により、積極的な地域参加を意図しようという教育観に基づいた教育プログラムであるところに意義がある。日本の学校教育及び総合的な学習や社会科教育に大いに示唆を与えてくれる教育プログラムであると評価したい。

### 【註】

- <sup>(1)</sup>文部省『小学校学習指導要領解説社会編』日本文教出版、1999年。  
<sup>(2)</sup>「地域学習」という用語については、児玉修

「地域学習」『社会科重要用語300の基礎知識』明治図書、2000年、p.198、を参照されたい。

- <sup>(3)</sup>澁澤文隆『新学力観に立つ中学校社会科地理の授業改善』明治図書、1995年。  
<sup>(4)</sup>身近な地域の歴史を調べる活動については、澁澤文隆「身近な地域」『社会科教育事典』ぎょうせい、2000年、pp.102-103、を参照されたい。  
<sup>(5)</sup>認識内容と方法の不可分な関係を明らかにした研究として、森分孝治「社会科における思考力育成の基本原則—形式主義・活動主義的偏向の克服のために—」『社会科研究』第47号、1997年、がある。  
<sup>(6)</sup>岩田一彦氏は、科学の研究成果を厳密に検討しての教科内容化が行われていないことで、分析と往復運動のない総合学習に陥る問題点を指摘している。『総合的学習を創る』明治図書、2000年8月、p.22、を参照されたい。  
<sup>(7)</sup>H. L. F. Iの教育プログラムの分析対象とした文献は、以下の通りである。  
○Ginny Graves, Hon. "Walk Around the Block." AIA 1997. CUBE: The Center for Understanding the Built Environment. Ginny Graves, Hon. AIA, Dean W. Graves "Box City. An Interdisciplinary Experience in Community Planning." FAIA 1999. CUBE. MARCY ABHAU, ROLAIN COP-ELAND, GRETAGREENBERGER. "ARCHITECTURE IN EDUCATION. A Resource of Imaginative Ideas and Tested Activities." 1986. Foundation for Architecture, Philadelphia. "VIEWFINDERS." Warwick RI, 1996. The Dunn Foundation.  
以下は、H.L.F.I発行のテキスト及び資料である。  
○Build Environment Teaching Tools. Spring 1999 building Blocks . WATCHER WORKOUT A NEW WAY TO LOOK AT OLD BUILDINGS . ENDANGERED PLACES IN INDIANA . HISTORIC LANDMARKS AT HOME. On the Street Where You Live. -Be a Building Watcher!- Historic House Research Handbook. Morris-



House EDUCATION PROGRAMS 98-99.  
Library & Information Center. VERAR-  
STAU Aurora, Insiana. Morris - Butler  
House. HUDDLESTON FARM HOUSE  
INN MUSEUM.

⑧文部省『新しい学力観に立つ社会科の学習指導  
の創造』東洋館出版, 1995年。

⑨学習指導要領の変遷とその過程の背景となった  
諸事象及び理論については, 岩田一彦「社会科  
地理50年の変遷とその背景」『社会科研究』第48  
号, 1998年, を参照されたい。

#### 【主な参考文献】

- ① マリー・ミックス・フォーレイ著八木幸二・  
野口昌夫・盛和春訳「THE AMERICAN  
HOUSE絵で見る住宅様式史」鹿島出版会, 19  
79年。
- ② ACEネットワーク編『建築・土木のことが  
わかる事典』西東社, 1996年。